

タイトル	・ 世間一般からの「オタク」に対する見方及びオタク自身の意識の変化について		
所属	・ 人文学部人類文化学科	氏名	・ 谷本佳穂

卒業論文の研究テーマとして私が選択したのは世間一般からの「オタク」に対する見方及びオタク自身の意識の変化についてである。私自身、熱狂的なオタクというわけではないが、オタクの部類に入っていると感じている。「オタク」という存在は今や私たちの日常生活において、ごく普通の存在になりつつある。また、「オタク」という単語は海外に輸出され、日本の文化のひとつとしても知られるようになった。そこで気になったのが、時代とともに「オタク」という存在の世間一般から見た印象の変化や自身がオタクである場合の意識の持ち方がどのようにして変化したのか、変化した背景にはどのようなことがあったのかということに関心を持ち、研究テーマとして選択した。



「おたく」という語は一九八三年の『漫画ブリッコ』六月号で中森明夫氏によって現在の意味で初めて用いられた、と言われている。オタクは大きく分けて六つの世代に分類することができる。これを基に、どのように「オタク」というものが変化してきたのか。初期のオタクは主にアニメやマンガを好む人が多く、様々な分野を広く知っていた傾向があった。一方で近年のオタクはある分野に特化した人のことを指すことが多い。
⇒これらはどのように説明することができるのかを調べている途中。

【参考資料】

大塚英志

2007『「おたく」の精神史 一九八〇年代論』朝日新聞社

中森明夫

1983「『おたく』の研究(1)街には『おたく』がいっぱい(再録サイトを参照した)

nyao,2013年12月16日,「『おたく』の研究第1回」,漫画ブリッコの世界

<http://www.burikko.net/people/otaku01.html> (再録サイト)

